

○「平家物語」とは

平家の興隆と滅亡を描いた(1) ( )である。

1165年二条天皇の崩御(天皇が亡くなること)から(2) ( )によって平家が滅亡した1185年に至るまで20年間を中心に描かれている。

○「木曾の最期」までの源平合戦の流れ

**もとも**

1156年の「3」

「では、源氏(義朝)と平氏(清盛)は味方同士で

あった。

↓この一年前、木曾義仲の父義賢は、頼朝の父義朝の命によって討たれる。義仲は信濃国(長野県)の豪族、中原兼遠のもとに身を寄せた。

**しかし**

1160年に起こった「4」

「では、敵味方に分かれ、最終的には平氏の

勝利。

↓この時、源義朝は殺害され、子頼朝は伊豆へ流罪となった。

**そして**

平氏一門が政権の中枢を担い、栄華を極める。「平家にあらずんば人にあらず。」

↓貴族、また皇族からの反感を買う。

**ついに**

源頼朝が伊豆で挙兵、また、木曾で義仲が挙兵した。

↓1180年から1185年にわたる、「5」

「の始まり。」

○木曾義仲について

木曾義仲は中原兼遠のもとに身を寄せ、そこで木曾党という一大豪族を形成する。作中に登場する義仲方の武将今井四郎兼平とは、めのと子の関係に当たり、幼少期からその主従関係を持っていた。

巴御前は、信濃国のごころから義仲に寄り添ってきた女性であり、今井四郎兼平の妹とされる女性である。武勇に優れ、また容貌も美しい女性であったという。

木曾義仲は以仁王の綸旨(帝や皇族からの命)に従い挙兵した。義仲軍は家族的なまとまりをもっていたとされ、わずか3000騎で、40000騎の軍を破ったその軍略も伴って、いち早く京(政治の中心)に入り、平家の都落ちを成し遂げた。

しかし、木曾義仲が政治に介入したことや、その軍勢の粗暴な行い(略奪など)によって、次第に京の人々から疎まれるようになる。

**ついで後白河法皇は頼朝に綸旨を下し、木曾義仲打倒の兵をあげた。**